

都市化の理論

— ワースとショバーク —

倉田和四生

- 1) はじめに
- 2) シカゴ学派の遺産
- 3) ワースの都市化理論
- 4) ショバークのワース批判
- 5) ショバークの都市理論とその問題点
- 6) 都市の社会学的研究枠組

【1】はじめに

現代は都市の時代であるといわれる。世界はものすごい速さで都市化しつつある。1800年ごろ、約9億であった世界の人口は、1960年には、約3.3倍の29.6億に達した。同じ160年間に人口二万以上の市(部)に住む人口は、2170万人から、約40倍の80320万人に増加している。また1800~1850年の50年間に世界総人口の増加率は29.2%であったのに対して、人口二万以上の都市部人口の増加率は132.3%に達している。次の1850~1900年に世界総人口の増加率は37.3%であるのに対して二万以上の都市部人口の増加率は、193.5%、次の50年間(1900~1950年)に総人口は49.3%の増加に対して、二万以上の都市人口は254.1%も増加している。都市人口はすさまじい勢で増加しつつある。¹

ところで「都市化」とは何んであろうか。都市化とは単に都市人口の(相対的、或は絶対的)増加を意味するだけであらうか。決してそうではあるまい。都市化は、もっと総合的な現象であって人口の都市化はあくまでその一側面にすぎない。それは、もっと社会的・文化的な現象である。

都市化とは、ワース(L. Wirth)が述べているように、都市的生活様式が増大していく過程に他ならないから、都市化を論じようと思えば、「都市或は都市性」を規定しておく必要がある。²

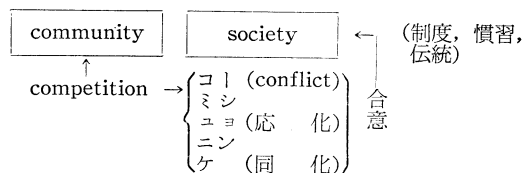
「都市化と都市性」の問題を最も体系的に検討したのはワース(L. Wirth)であらう。ワースの都市化の議論に入る前にシカゴ学派の遺産を簡単にみておこう。

【2】シカゴ学派の遺産

シカゴ学派は、スモールによってその基礎が築かれたが殊にパーク等によって1920年代に創られた都市研究は、方法的に人間生態学を重視したところから生態学派とも呼ばれる。

パークの生態学理論の基礎は人間の生活をコミュニティーとソサイエターの二つの次元に区別し、それぞれの組織原理として競争と闘争(conflict)、応化、同化を指定する。

コミュニティーは生態的地域的秩序から成立している。即ち地域空間の中の人間は、競争と淘汰の過程においてコミュニティーを形成し、それが更にconflict、応化、同化によって合意が成立するところにsocietyが形成される。



したがってコミュニティーは地域的に組織され、地域に根をもった個体群であり、共棲的な、単位である。即ちこれは共同の居住地の境界内で動植物と同じように共住している諸個人や制度の集りである。³

ソサイエターはコミュニターの基盤の上に成立する。ここではコミュニターの組織原理としての

競争が昇華した形態としての conflict, 応化, 同化の過程がはじまる。この過程では生物学的競争過程と違って高度のコミュニケーションを行なうことが可能となり、これによって人々の間に合意を形成させることが出来る。⁴ ここから制度や慣習がつくられる。その組織されたものがソサイエターである。パークは、人間関係の階統として、

- | | |
|-------------|-------------|
| 1) 生態的地域的秩序 | } community |
| 2) 経済的秩序 | |
| 3) 政治的秩序 | } society |
| 4) 文化的秩序 | |

の四つを考えているが、これらはそれぞれ community と society に対応している。これはまた共棲の下位構造と文化的上位構造であり、前者が後者の基礎をなしている。人間生態学は社会の共棲的下位構造を分析の対象とする学問である。しかし単に動植物の生態学ではなく、人間の特性からもたらされる独自の性格が生まれる。即ち人間は自然的物理的環境に一方的に適応するだけでなく、むしろこれに積極的に働きかけることが出来るし、高度のコミュニケーションを通して社会を作りあげる。したがって人間のコミュニティーは単に、自然的環境に一方的に適応することによって形成されたものではなく、むしろ人間が環境を作りかえていくことによって創り出されたものである。このように人間のコミュニティーは、動的な性格をもつと同時にコミュニケーションを通して作られた制度をも含んでいるところから生物的レベルの生態学的秩序とは決定的に違ったものと成らざるを得ない。

パークは自分自身の業績もさることながら、シカゴ学派の中心的な人物として多くの研究者を育て、チームワークによって多くのすぐれた実証的研究をつみ上げ学界に大きな功献をした。

シカゴ学派の都市研究の基礎には「都市化や移民」を含む「社会変動」の諸要因が「都市社会の生活様式」に衝激を与えるため、その結果として「社会病理」現象が生まれるという発想があった。したがって「都市化」は「コミュニティー研究」にとっても「社会病理」の研究にとっても極めて重要な意義をもっている。

シカゴ学派の業績は二つの種類に分けられる。一つは社会病理的研究であり、他は community

study である。⁵ 社会病理的研究の主なもの、⁶

- 1) Clifford R. Shaw, *Delinquency Areas*, 1929.
- 2) Frederick M. Thrasher, *The Gang*, 1927.
- 3) Nels Anderson, *The Hobo*, 1923.
- 4) Ruth Shonle Cavan, *Suicide*, 1928.
- 5) Robert E. L. Faris and H. Warren Dunham, *Mental Disorders in Urban Areas*, 1939.
- 6) Walter C. Reckless, *Vice in Chicago*, 1933.
- 7) Paul G. Cressey, *The Taxi-Dance Hall*, 1932.
- 8) Bingham Dai, *Opium Addiction in Chicago*, 1937.
- 9) Ernest R. Mowrer, *Family Disorganization*, 1927.
- 10) E. Franklin Frazier, *The Negro Family in Chicago*, 1932.

があげられる。ここで取り扱われているのは、

- 1) 非行少年, 2) ギャング, 3) 浮浪者, 4) 自殺,
- 5) 精神障害, 6) 売春, 7) ダンサーの生態, 8) 麻薬患者, 9) 家族解体, 10) ニグロ家族

と多岐にわたっているが、共通する方法としては、

- (1) 現象の範囲を地域 (zone) に図示する。
- (2) 経済的地位との関連をみる。
- (3) 現象の範囲と全体としての市の経済的地位との相関をみる。(すべてみられるわけではない)

このような実態調査の結果として、一般的に云えることは、これらの社会病理現象が決して無秩序に生起するのではなく、都市(シカゴ)の地域構成と一定の関係を示しているということである。即ちたいの社会病理現象は都心部に近い zone in transition と呼ばれるところに集中的に発生し、それから遠ざかるにしたがって少なく成っていく。このような都市の地域分化は、パーゼスの同心円理論に大胆に図式化されている。

次に community study の代表的なものとしては、⁷

- 1) Roderick Duncan Makenzie, *The Neighborhood ; A Study of Local life in the City of Columbus, Ohio*, 1923.

- Ernest W. Burges, The Growth of the
- 2) Louis Wirth, The Ghetto, 1928.
- City, 1925.
- 3) Harvey Warren Zorbaugh, The Gold Coast and the Slum, 1929.

の三つがあげられる。

これらの地域社会研究では都市に経済、人種、国民感情などにもとずいて地域分化がおこり、近隣が形成されることを実証的に分析している。

以上述べたようにシカゴ学派は社会病理的な研究と地域社会の分析の二面について極めて経験的実証的な研究をつみあげていった。こうしてすばらしい業績が矢つぎ早に発表され、いつの間にかシカゴ学派という呼称が学界に定着していったのも当然のことであった。

アメリカにおける本格的な都市社会研究がここから始まったのはいうまでもないが、少しおおげさにいえば、経験的一実証的な社会学はシカゴ学派によって始められたといえないこともあるまい。(ズナニェツキーと共に『ヨーロッパとアメリカにおけるポーランドの農民』を書いたタマスもパークの協力者であった。)ともあれシカゴ学派が学界に与えた衝激はたしかに大きいものであった。

しかしながらシカゴ学派の業績に問題がないわけではない。いまそのいくつかを指摘してみよう。⁸

まず第一に、既にみてきたように生態学理論はホブズ的な社会契約説に似た「自然状態、や「自然的秩序」を仮定しているが、これは実証性を欠いた単なる追憶にすぎない。人間コミュニティーにおいてこのような仮説を分析の出発点にすることは、シカゴ学派の身上であるはずの実証性を放棄することになる。

次にコミュニティーを自然過程とみる立場からは貧困も単なる自然過程として扱えられ、肝心な勢力関係の分析が消えてしまう。

第三に、同様に segregation を考える場合にも経済的な視点からだけ分析するので、人種間の差別、カットウの問題がとらえられていない。

第四にこのような分析方法では power—relationship と socio-economic complex は見落されている。

第五にコミュニティーとソサイティーが区別されているがその関係があいまいにされている。もし研究がコミュニティーに限定されるのであれば社会解体 (social disorganization) の分析は不可能であろう。

第六に、地域分化や社会病理の原因として、経済を強調したところから一種の経済決定論的な色彩をもっているところに問題がある。

第七に、生態学的プロセスとして、

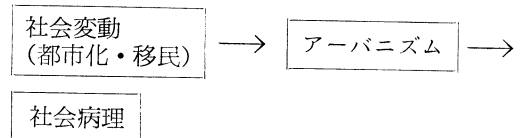
- 1) concentration 2) centralization
- 3) segregation 4) invasion 5) succession

をあげているが、1)と2), 3)と4)の区別ははっきりしないし、また一貫してもいない。

最後にシカゴ学派最大の問題点は、都市における、人間関係に関して社会解体をあまりに強調しすぎたところにある。この問題については、次のワースのところまで改めて論じてみよう。

【3】 ワース (Wirth) の都市化理論

話をワースにもどそう。ワースはシカゴ学派の伝統的発想即ち、



をふまえながら、その研究方法がコミュニティー研究に偏重している実情を反省して、“Urbanism as a way of life” (1938) を書いたが、これは「都市の定義としてのアーバニズム」と「アーバニズム分析の三重図式」の二つから成立っている。

ところでアーバニズムの拡大・変化が都市化にほかならないから、ワースの関心はそのすべてが都市化に向けられているとみてよい。

まず「都市の定義」については、アーバニズムは 1)人口のサイズ 2)人口密度 3)異質性の三つを要件として成立し、いずれか一つでもかけては十分でない。即ち「都市は社会的に異質的な諸個人の相対的に大きい密度のある、永続的な集落」と定義している。⁹

このような定義は同時に都市的生活様式の諸特性の複合体としての「アーバニズム」を規定するものと考えられている。

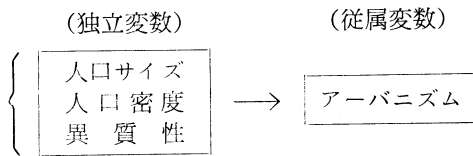
まず「人口量」が増大することによって「空間

的分離，親族，近隣の紐帯と民族的感情の弱体化ないし欠如，競争と公的統制の発生，非人格的，皮相的，一時的，匿名的，詭弁的，合理的，功利的金銭的な社会関係，憤し，無関心，飽きの態度，内面的原子化，精神分裂の性格，主体性の喪失，分業，専門化と不安定な相互依存，第二次接触と利害集団の形成」がすすむ。¹⁰

「人口密度」の増大によって「分化と専門化，高尚と野卑，富裕と貧困，教養と無知，秩序と混乱といったコントラストの明確化，労働と居住の分離，空間的分離，相対的な思考様式と寛容的態度，生活の世俗化，孤独感，欲求不満，軋轢，焦燥」などがすすむ。¹¹

「異質性」の増大によって「カースト制の崩壊と階級構造の複雑化，個人の不安と不安全，詭弁性とコスモポリタニズム，個人の集団への分属のためパーソナリティーの部分的機能，集団成員の急速な交替，家屋の非所有，流動的大衆の形成，非個性化と平準化」の進行。¹²

これらの三つの変数はアーバニズムの規定要因であり独立変数である。



このようなアーバニズムの規定要因の分析とアーバニズムの特性についての考察を終ったワースは更にアーバニズムの社会的調査枠組を提供している。むしろこのような調査の枠組を示すことが，この論文の目的の一つであったろうし，この論文が学界に大きな影響を与えた理由でもあろう。それは，

- 1) 人間生態学的一人口，技術，自然的，物理的構造
- 2) 社会学的一社会構造，社会制度，社会組織
- 3) 心理学的一態度観念とパーソナリティー

の三つのレベルの研究を指摘している。

ワースが「人間生態学」的に注目したものとすれば，人口，高い壮年層の比率，多い外国生れ，多い黒人，低い出生率，人口再生産の不能，高い死亡率などである。

「社会学」的研究としては，第二次接触の優位，

親族の紐帯の弱体化，家族の社会的意義の減少，近隣の消失，社会的連帯の崩壊，専門化，カーストの崩壊，自発的集団の続出などである。

「社会心理学」的レベルでは，パーソナリティーの分裂と不統合。公的な組織集団による社会統制。

その理論的な特質を整理すると，①アーバニズムの規定要因として三変数をあげ，これをいずれも必須のものとしたこと。②アーバニズムの研究を恣意的なものから前進するための理論的枠組を示したこと。この第二点こそ，これまでのコミュニティー研究中心から脱脚して都市社会学へと発展するふみ台を作ったことになる。

これがワースの理論構成のあらましであるが，その基本的な問題点としてはアーバニズムの規定要因として，「人口サイズ」，「人口密度」「異質性」の三つをあげている点であろう。これは単純化して考えると人口が，アーバニズムを規定するという一種の人口史観的な発想である。ワースにはジンメルの影響が強いとされているが，むしろデルケームの影響が大きいのではないかとさえ考えられる。勿論アメリカではスモールやギデングスなど初期の社会学者以来人口を重視する伝統は存在したが，殊のほか人口を重視したのはデルケームの社会形態学であったから。それはともかくとして，人口によってアーバニズムが規定されるという考えをはっきりと示していることは極めて重要な問題を提供したことになる。

もし人口が一方的にアーバニズムを規定するのであればそれは間違いなく人口史観におちいつているものであり，それは明かに否定されなければならない。社会は人口によって一方的に規定されるわけではなく，むしろ社会構造の変化によって人口構造は大きく変る。例えば，出生率は態度，価値の変化によって大きく変るし，人口サイズや密度も公害や郊外化などによって大きく変化する。

ワースが人口によってアーバニズムが規定されると考え，規定されたアーバニズムを三つのレベルから研究するというのであればこれは全く問題にならない。しかし必ずしもそうでなくて，三つのレベルにそれぞれ独自性を認めていると思われる節がある。即ち「しかし社会制度や慣習は，ほんらいそれが生じた理由とは別の理由から変容され持続されるだろうということ，したがって都市

の生活様式はその発生に必要な条件とはまったく別の条件で存続するだろうということを認めておかねばならない」¹³と述べている。したがって人口が他のレベルの一方的な決定因子であるというような人口史観におちいっていると考えるべきではない。ワースの考え方は、人口をアーバニズムの基本的な変数とは考えているが、その具体的な表れ方には、いろいろの可能性を許しており、少なくとも19世紀的な決定論におちいっているのではない。しかし、この間の説明があいまいである点は誤解をまねくもとなっている。

近江哲夫はこの点について第一次的特性（生態学的）が第二、第三次の特性を規定するとする考えに反対して「諸都市の第二次、第三次の性格を『都市』の諸条件すなわち人口量、密度、異質性の大小によって一元的に説明することの不可能はもはや明らかである。」¹⁴と述べている。

このような指摘は確かに重要であるが、既に述べてきたように、ワースは人口的基礎によってアーバニズムが規定されると考えながらも、三つのレベルの間には、相対的独自性を認めたものと考えられる。

第二の問題点は近江が指摘するように、ワースの第二、第三の特性を単に第一の特性に一方的に規定されるものとしてではなく、独立変数として規定しなおす必要がある。近江が「都市のフィジカルな次元の成長に随伴して進む社会進歩の図式を放棄し、文化ないし社会類型の相対性を認め、かつこれを独立の変数と考える立場に立ったことを意味する」¹⁵という指摘は確かに正しい。ワースに於いてあいまいに残されていたものを明確に規定したわけである。ただ近江は第二、第三の特性のもつ相対性の故に都市化の普遍的な尺度たり得ないとしてこれを放棄している。

都市化の規定が人口のみに限定されるなら、それがいくら普遍性をもっていたとしても、アーバニズムの測定は不可能となり、結局ワース以前の生態学に逆もどりしてしまうことになる。第二、第三のレベルを含めた都市化の論議は不可能であろうか。それはもし一定の *cultural pattern* を決めておいて、それにしたがって比較すれば必ずしも、不可能ではないであろう。そのような、*cultural pattern* として、例えば、パースンズ(T.

Parson)の *pattern variables* はかなり有益なものであろう。そのような意味でコルブ(W. L. Kalb)の論文はもっと発展させられるべきであろう。¹⁶

第三の問題点はアーバニズムの規定要因としての三つの要因のうちの第三の異質性の問題である。この異質性は人口のサイズ、人口密度とは、次元の異なったものであることは明らかである。倉沢進は「人口の異質性はすでに特定の規準にもとづく社会的分化と特定の社会構成の型を前提としており、近江のいう如き何人といえども承認する形態学的次元の変量ではない。」¹⁷としてこれをしりぞけ、代りに「非農業的産業」を入れている。このような批判は確かに当を得たことであるといえるが、しかし他方、異質性を広く解釈すると農業と非農業という区別も異質性としてとりあつかえる。高田保馬の「成員の異質性」はそのようなものであると考えられる。したがって異質性を非農業に入れかえただけで、ワースの決定的な批判になるかどうかについては問題が残されている。

第四の問題はワースの第三レベルが、パーソナリティーの研究となっているが、このような心理的或は社会心理的なレベルの研究で十分かという問題である。倉沢は都市社会の三つの側面として形態面、構造面、意識面の三つを区分しているが、これはワースの分類とほとんど重なり合うものと考えられる。

しかし都市社会の特性をとらえる場合、単にパーソナリティーの研究では十分でない。都市社会の文化的特性や価値体系は各パーソナリティーに内在化しているが両者は次元を異にするから、社会学的な接近としては、当然都市社会の文化及び価値体系の分析をめざすべきであろう。ここでパークの組織とワースの枠組を対比させることは非常に興味のあることである。

パーク	ワース
1. 生態的一地域的	1. 生態学的
2. 経済的	2. 社会組織
3. 政治的	
4. 文化的	3. パーソナリティー

この点に関するかぎりパークの方がワースよりも社会的であったといえる。ワースにおいては、個人的、心理的な傾向が強くなっている。しかし

この点については、個人的心理的よりも、社会的・文化的アプローチが必要である。

第5に都市の時間性的問題がある。ジョーバーグと倉沢によると、都市は時間的制約の中に成り立っているものであり、永遠の都市というものはない。少なくとも産業革命以前の都市と以降の近代都市とは全く性質を異にするのであるから同列に都市化を論じることは出来ない。したがって都市化は近代都市にかぎるべきであるという。

勿論これは妥当な考え方だといえるが、この批判を徹底させるためには、近代以前の都市社会についてのアーバニズの規定を明確にする必要がある。

最後に都市の空間性的問題が残されている。この問題を最も明確に打出しているのは、ジョーバーグ(Sjoberg)である。彼によれば、これまでのアメリカの都市学者の考え方や研究は、アメリカを世界のすべてと考へアメリカ以外に異なった社会が存在することを全く考慮していなかった。アメリカ以外の社会の研究がすすむにしたがって、次第にこれまでの理論がアメリカの都市理論であることの自覚と反省が出て来た。同じく都市とよんでも東西の都市は全くといってよいほどその性格を異にしている。そこでこのように違った都市の比較研究が要請される。ジョーバーグが提唱するものがこの比較都市社会学である。

次にジョーバーグのワース批判についてみてみよう。

【4】 ジョーバーグのワース批判

1920年代に成立したシカゴ学派の伝統は非常に強い影響を学界に与え、都市研究の主流として定着した。生態学的方法や人口・技術といった客観的尺度で実態調査の可能なものに重点を置く研究方法は経験主義、実証的方法を尊ぶアメリカ的な学風の所産であった。したがってシカゴ学派に対するラディカルな批判もつい最近までほとんど現われていない。都市の社会学的研究は長くシカゴ学派の伝統のもとに生きてきたのである。

このような学問的既存体制にたいして勇敢に挑戦したのがジョーバーグの批判であった。シカゴ学派やワースにたいしてジョーバーグが提起した問題は6つある。¹⁸ まず第1点は、既に指摘したよう

にシカゴ学派、殊にワースは「都市」を時間を超越したものとして把握している。ところがジョーバーグのように実際に近代都市と前近代都市とを比較検討すると、両者は全く異質のものであることがわかる。したがって都市化研究の対象としての都市は時期的に或は内容的に区別されなければならない。このような見地からジョーバーグは実際の経験にもとずいて都市を「産業型都市」と「前産業型都市」に分類した。彼の著書『前産業型都市』は、このような意図のもとに為された分類の一つの研究である。彼はこの研究を通して比較研究の必要性を痛感することに成ったといえる。

第2に都市の空間的限定の問題である。前近代社会における都市研究に従事したジョーバーグはワースの期待とは違って同じく都市と呼ばれているものが、洋の東西においてはその内容が著しく異なっていることを知った。既に述べたようにシカゴ学派の視野は北アメリカ合衆国に限られており北アメリカの都市の性格はそのまま世界の都市の性格であると信じられ、そもそも疑いをさしはさむ余裕さえもっていなかった。しかしアメリカ以外の、殊に前産業社会の研究がすすむにつれて、このようなアメリカの学者達の信念があやまった盲信にすぎないことが次第に明らかに成ってきた。ジョーバーグの論文“Comparative Urban Sociology”はこのような問題提起として書かれたものである。

第3は理念型分析から変数分析への転換である。ワースではアーバニズムという一つの理念型を用いて分析している。M. ウェバーの理念型にみられるように理念型分析は現実と理念型とのズレを究明するのに適しているが、それは静態的な分析にとどまっている。動態的或は体系的な分析をおこなう為には、いくつかの変数のシステムとしておさえることが必要である。ワースのアーバニズム研究の三重図式が単に研究の視角にとどまっていたのに対して、ジョーバーグの理論は都市社会のキイ変数の提示であるから、そこには分析方法の質的な転換(の可能性)がみられる。

第4に前にも述べたようにカシゴ学派は都市を社会解体(social disorganization)の場として扱って、これを過度に強調しすぎているが、これに対する反証はいろいろな形であらわれている。

例えば

1) アクセルロッドによるデトロイトの実証的な調査は、住民の大多数がフォーマルなグループに加入しており、その参加も無秩序ではなく構造化されていることを示している。またインフォーマルな集団結合はきわめて普遍的な現象であることを実証した。¹⁹

2) W. F. ホワイトのギャング集団の研究はイタリヤンスラムにおける少年達の社会的結合を如実にえがき出しており、都市が解体地域でないどころか、スラム地域においてさえ極めて強固な社会関係が存在することを示している。 그레이ザーやガンスの研究もこれと同じ方向を示している。²⁰

3) W. H. ホワイトはいろいろの都市の人間が組織のなかに生きている姿をえがき出している。²¹

4) オスカー・ルイスはメキシコ郊外の都市化過程の研究によって、都市化が必ずしも「社会解体」をとまなうことなしに進行することを実証した。²²

5) ギューリック等の調査では親族関係、友人関係、近隣関係、地域社会への帰属感などの諸点について都市的とみられるものは住民の10%にすぎなかった。²³

6) 広くみるとカツとラザースフェルトのマスコミ研究から指摘されたように、マスメディアが直接的に原子的個人を操作するのではなくその間にオピニオンリーダーが介在するといういわゆる「二段の流れ」もこの方向にそっている。²⁴

7) 更にエルトン・メイヨーやレスリスバーガー等の産業組織におけるインフォーマル・グループの再発見もシカゴ学派の社会解体理論の反証となっている。²⁵

以上いくつかの研究例は、いずれもシカゴ学派やワース等が過度に強調した「社会解体論」が決して都市一般の特徴ではないことを示している。われわれはここでもう一度1920年代のシカゴの社会的状況をふり返ってみる必要がある。アメリカは新大陸であり移民の国であるが、殊に移民達がまず最初に定着したのは大都市であった。これらの大都市は、東部ではニューヨーク、ワシントン、フィラデルフィア、ボストンなどがあるが、

中北部では最大の中心はシカゴであり、シカゴは文字通り「人種のルツボ」であった。殊に第一次大戦によって生み出された戦争難民が大挙して自由の国アメリカにただれ込んで来たのが1920年代であった。シカゴの町を社会調査の実験場として選んだシカゴ学派の学者達にとって、無数の人種がそれぞれの文化に執着して他をかえりみず生活していく姿や、得ても知れない社会病理現象は全体としてなんらの秩序もなく社会的なつながりのないものに映ったのはある程度無理からぬところであったかも知れない。しかし sub-culture の存在や社会病理現象の出現それ自体は社会解体現象ではない。むしろ sub-culture の存在自体、マイノリティー・グループがドナミント・グループの中で社会生活を維持するための防衛機能であり、そこには強固な社会的連帯が存在する筈である。シカゴ学派にはシカゴ市の把握方においてすら sub-culture の存在と社会解体の混同があった。ましてこのような見方が都市一般に通じる論理でないことは明白である。

第5に、これは主にレッドフィールドに向けられたものであるが、folk society 対 urban community の論義は論理的な誤りを犯していると指摘している。何故なら folk society は、全体社会 (total system) であるのに対して urban community は単に部分社会 (partial system) にすぎないからである。urban は rural と対比すべき概念である。

最後に生態学的構造としての都市は文化的—社会的制度に影響を受ける sub-system である。しかもこのような都市は権力や教育の焦点であるから社会変動の中心でもある。したがってこれを独立変数として再編成しようというのがショバークの主張である。

【5】 ショバークの理論と問題点

(1) 問題意識

ショバークの問題意識は時空を越えた普遍的なものと考えられているシカゴ学派の都市理論にたいする勇氣ある挑戦であった。その具体的な論究は「比較都市社会学」の形で提起されている。その問題提起が学界に与えた衝激は決して小さくない。比論的にいえばアメリカを世界のすべてだと

盲信していたアメリカの都市社会学者にたいして全く異なったタイプの都市が世界にはいくつも存在することを具体的に示したという意味でコロンプスの新大陸の発見にも比すことが出来よう。

彼は比較都市社会学を現実に建設していく為に3つのスラップを示している。²⁶ それは

- (1) 現存する資料の利用
- (2) より適切な理論の形成
- (3) 比較的分析法を用いて仮説をテストすること。

であるが、²⁷

(1)の現存する資料の利用については次のような留意点を示している。

- ① 社会学の領域をこえて総合的に研究する。
- ② アメリカの社会(学)科学的思考法にとらわれない。
- ③ 言語の障害をこえ世界的視野で資料を集める。
- ④ 政治体制の違いを超えて研究する。

このようなやり方でデータを集めて比較研究をはじめると、その為には比較都市社会学を可能にするような適切な理論的枠組が要請される。

ショバークによれば伝統的な都市研究の方法は8つに整理することが出来る。²⁸

第1は Urbanization School と呼ばれる。

これはパークやバーゼスなどを中心にするシカゴ学派の考え方の基礎にあったが、ワースやレッドフィールドによって明確に理論化されたものである。この学派の中心課題は、前産業型社会から産業型社会への変動のプロセスとパターンを究明するところにある。ワースやレッドフィールドにとって urbanism は「世俗化」、「第二次的接触」、「任意集団の優位」、「役割の分化」、「守られなくなった規範」などの特徴をもつものと考えられている。これはやがていくつかの方向に発展させられたが、これに対しては多くの実証的な反論がなされている。

第2は Sub-Social School

この学派はパークとバーゼスに代表される。これは地域空間における人間の生活過程の研究であり、Sub-Social な変数による社会の説明である。このようなシカゴ学派の考えは、19世紀を風化した「社会ダウニズム」と「古典派経済学」の強

い影響を受けている。しかし「社会」を sub-social な要因で十分に説明することは不可能である。

第3は、Ecological Complex School

この学派には Duncan, Schnore 及び Gibbs, Martin が属している。Duncan, Schnore は ecological complex として ①environment ②population ③social organization ④technology を考えたが、物質主義的な見地に立ち、価値志向は個別的なものとして科学的処理を断念しているところに問題を残している。Gibbs と Martin は分業、消費財の配分、技術の発展を重視している。

第4は、Economic School である。

これには、マルキストとコーリン・クラークの影響の下にある Shevky, Bell, Lacaste 等がいる。彼等は社会のスケールとして、①技能(skill)の配分、②生産活動の構造、③人口の構成をあげている。

第5は、Environmental School

マンフォードのように都市を環境との関連で捉え、都市を自然に適應するものとして考えている。したがって自然環境を都市の決定要因と考えた。

第6は Technological School

この見方はホーレー (Hawley) とオグバーンの2人に典型的にみられる。技術は不可逆的に発展していく性質のものではあるが、政治的一文化的要因によって影響を受けている。

第7は、Value-Orientation School

これには M. ウェバー、コルブ(Kolb)、ファイアレイ(Firey) 等がいることは既に述べた。都市の社会構造の変数として価値体系の重要さを主張する。

第8は、Social Power School

ショバークはこの見地を導入したのとしてフォーム(Form)をあげているが、その他に F. ハンターのリージョナル・シターの研究、R.A. ダールのニューヘブンの調査、R.W. ウォルフィンガー、N.W. ポルスビー、ロッキーなど多くの業績がみられる。²⁹ 更に古典的なリンドのミドルタウンやウォーナーのヤンキーシターシリーズの研究もこれに入れることが出来る。

以上8つの方法を整理してみたが、これらの方法はいずれも一面的であって完全な方法とはなり

得ない。より適切な理論的枠組をつくる為にはこれらの方法に含まれている変数をひき出して統合的な枠組を作る以外にはない。

(2) ショーバークの理論的枠組

これについて彼は4つの独立変数——都市、権力、文化的価値、技術——を提起している。

まず第1の変数「都市」はシカゴ学派の都市研究の伝統にのって生態学的人口構造を意味している。シカゴ学派の生態学的構造としての都市は impersonal competition と natural environment を強調しすぎ、社会的・文化的側面が軽視されているところに問題を残している。ショーバークによれば、世界の諸都市の生態学的パターンを説明するには biotic view point はあまり有効な分析方法であるとは思えない。

このような方法が有効であるためには世界の都市は「文化的価値」や「権力構造」や「技術」の進歩と無関係でなければならないが、実際にはそのような都市は現存しない。むしろ都市の生態学的構造は文化的価値や権力構造に強い影響を受けている。したがってショーバークにとっては生態学的タイプの説明として「都市」を独立変数にすることを認めるが、シカゴ学派の考え方にそのまま追随するわけではない。

都市は政治的組織と権力、公式の教育の中心地であり、また農村以上に公的な社会統制を受けている。したがってこのような構造的な必須要件をそれぞれの社会において明らかにすることが必要である。このように都市の機能的要件を明らかにしその中に独立変数としての都市を組入れることが目下の急務である。

第2の変数は「文化的価値」である。

都市社会における文化的価値の果す意義を高く評価する仕事はシカゴ学派には欠けていた点であるが、これはファイアレイ (Firey) やコルブ (Kalb) の研究やモスラム社会における宗教的価値の研究において明確にされた。ファイアレイはボストンの中央部の土地利用の実態調査からシカゴ学派の生態理論、殊にパーゼスの同心円説が事実に反することを実証した。ボストンの中心部に近い(パーゼスの説にしたがえば zone in transition にあたり、移動がはげしく、スラムが形成される地域)とところにあるパーコン・ヒル

は100年も前から高級住宅街として象徴的な意味をもっている。彼は土地利用において文化的価値の果す意義を実証することによってシカゴ学派が前提して来た「価値体系、観念、目的は土地利用には影響を及ぼさない」という仮定を完全に否定したわけである。

コルブは彼の論文の中で都市の社会構造を分析するに際してパースンズの Pattern Variables の利用の可能性を示している。

ショーバーク自身は「前産業型都市」において宗教的価値がいかに大きな役割を果たしているかを示している。

ワースの場合には都市社会研究の三重図式を示したものの、アーバニズムを規定するものが人口の量質であったため、アーバニズム研究に占める価値体系の位置づけはきわめてあいまいなものに終わっている。これと対照的にショーバークは価値体系の特質こそが都市社会関係の相違を説明する要因であると考えている。

第3の変数は「技術」である。

都市社会のなかで「技術」を重視する考えはオグバーンやホーレーの中にもみられる。技術の発展が都市の社会構造に与える影響は、都市化—産業化が家族や親族に与える影響や技術と都市社会の型との関係として把握されている。

そこで技術的な観点からみて、都市社会の構造的要件は何かという問に答えてショーバークは、

- 1) 大規模な合理的組織
- 2) 業績 (achievement) 主義による流動的階級構造
- 3) 結びつきがさほど強くない核家族
- 4) 科学や技術を強調する大衆教育
- 5) マス・コミュニケーション

の5つをあげている。しかしこのような都市社会の構造要件を論ずる際にこれまでアメリカの学者がおおちいっていた「わな」はエスノセントリズムであるが、これを避けるため留意すべき点としては

- 1) アメリカの社会構造をあまり自由に一般化しないこと。
- 2) 宗教や国家権力との関係をさぐること。
- 3) 産業化した社会と産業化しつつある社会との関係をさぐる。

4) 構造要件のなかには互いに矛盾するものがあること。

5) 都市の社会構造を孤立して考えない。
が指摘される。

最後に都市社会の独立変数として「権力」があげられる。これには3つのレベルが区別される。

- ① 地域社会の権力が都市社会に与える影響
- ② 国家権力によって社会構造や生態構造に与えられる影響
- ③ 国際的レベルとして産業化した国の経済力は低開発国の都市成長を刺激することが出来る。

いうまでもなく「権力」の研究は、リンドのミドルタウン、ウォーナーの階層研究、フロイド・ハンターのコミュニティーの勢力構造論等の中で発展して来たものである。ショバークは彼等の遺産を自己の理論体系の中に組入れようと考えている。

ショバークはこれら4つの変数を用いて都市社会を分析しようとする。

(3) ショバークの貢献

ショバークの貢献として指摘されるものは第1に、特定社会(Society)の文化の独自性を認め西欧社会に存在したエスノセントリズムを打破したことにある。これは、ショバークのように「前近代社会」の研究者にしてはじめて可能と成った。これは非常に大きな貢献である。

第2はシカゴ学派の伝統に正面から挑戦し人間生態学理論を最終的に批判しつくしたこと。ソサイエティの基盤をなすコミュニティー研究に傾斜したシカゴ学派の都市研究の中でも、ワースの三重図式は正しい意味でのソサイエターの研究へ重要な一歩をふみ出してはるがい、ワースにおいてはまだ十分に生態学理論からの脱皮に成功していない。ワースの方向がショバークによって完成に近づいたというべきであろう。

第3点は、ワースのアーバニズムが一つの理念型であり、そのかぎりにおいて静態分析にとどまったのに対して、変数の組合せによる動態的分析を用いた点は、方法論的にみて大きな前進である。

第4点は四つの変数に「価値」と「権力」を入れることによって人間生態学の方法とは全く違った社会的・文化的要因をとり入れたこと。

要約すれば都市社会の研究の方法として人間生態学から本格的な都市社会学がここに形成されたと考えられる。

(4) ショバーク理論の問題点

以上述べて来たようにショバークの都市理論はシカゴ学派の伝統、殊にワースの業績に比較しても飛躍的な進歩を示していることは確かである。しかしながらショバークの都市理論ははまだ未完成であり、多くの問題点をかかえている。疑問とされる点についていまだ少し検討してみよう。

第1は四つの変数がひき出された論理に関連している。漸新な試みとしての四つの変数は確かに興味をひくものであるが、重要な点はいかなる論理によってこれら四つの変数がひき出されてきたかについて説明がほとんどなされていない。四つの変数が妥当なものであるかないかの問題の以前に、四つの変数の摘出の論理がまず問われなければならない。しかし残念ながらそれには殆んどふれられていない。

第2はこれと関連してショバーク自身が認めているように四つの変数の Order が違っている。これらの関連をどのように扱うのか十分に説明していない。更に構造的要素(価値)と機能的次元(権力)との区別或は関連についても述べられていない。

第3に「技術」と「都市」(city)は社会構造の sub-structure であると考えられるなら、「価値」と「権力」が社会構造として残るが、これだけで十分であるのかどうかについても疑問が残る。「政治」が変数としてあげられるのであれば「経済」も当然変数として選ばれるべきではなからうか。いずれにしても変数のひき出し方についてのシステマティックな説明がないところに最大のウイークポイントがひそんでいる。

最後にショバークの場合には変数分析であるため、都市化の測定の可能性がひらかれているが、変数分析の四つの変数の提示だけで都市化の測定の仕方は示されていない。変数をどのように指標化し、どのようにして測定するのかを示し、それを実証するのでもなければ、理念型分析を超えた変数分析とはいえない。

更にすべての要因を変数としておさえ、その組合せで分析することが現実の学問水準で十分に可

能なのであろうか。このような批判にはパレートの変数分析に対するパースンズの批判がある。

以上問題点をいくつか示したが、要するにショバークは伝統に挑戦して極めてユニークな方向を示したが、その理論はまだ出発点を示しただけで十分整備されているわけではない。これらの問題点が答えられたとき、彼の理論体系はその全容を現わすであろう。

【6】都市の社会学的研究枠組

ショバーク理論の問題点は秩序を異にする変数が混在していること及び変数の選び出し方の論理の不明確さにあったから、この点を補った別の分析モデルを示す必要がある。

ここで T. パースンズの社会構造モデルを適用して、都市の社会学的研究枠組を明示しておきたい。³¹

枠組構成の原理として、

- 1) 生態学的構造は都市社会の sub-structure とみる。
- 2) ワースのアーバニズム理論のように人口の量質組立が都市的生活様式を一方向的に規定する要因とは考えない。両者は相互に影響しあう関係にあるが、それぞれ独自性をもつものと考えられる。
- 3) 社会構造の研究法として構造機能分析法、および社会変化の分析をおこなう。

以上の原則に立って研究枠組を具体化してみよう。

〔I〕生態学的構造

- (1) 人口については、
 - 1) 都市の総人口
 - 2) 人口構造（性比、性別、年齢別人口構成その他）
 - 3) 人口動態（出生・死亡・自然増）
 - 4) 人口流動（昼間人口・夜間人口、流出先・流源入）
 - 5) 人口移動（転出・転入）
- 等について分析する。
- (2) 自然的・物理的構造
 - 1) 自然的・地理的条件
 - 2) 土地利用の形態（都市的土地利用）
 - 3) 地域構成
 - 4) 都市的建造物の集中・分散

等についての分析。

〔II〕都市社会の構造と機能

社会構造の分析においては、すべての要因を変数とすることは現在の知的水準では不可能であるから、構造機能分析法においては比較的に変化しにくい要素をコンスタントなものと考えこれを構造的単位として分析する構造分析と、そのような構造を可能にする条件を分析する機能分析から成っている。

- 1) 構造的単位としては、「役割」、「集合体」、「規範」、「価値体系」の四つがある。

「役割」は個人の行為の局面であると同時に集合体の一構成単位でもある。したがって「役割」は個人と集団の媒介概念である。

「集合体」は役割の体系である。

「規範」は、集合体に内在し役割の相互作用を可能にするルールの体系である。

「価値体系」は、「役割」や「規範」を支えている基本的な志向である。

- 2) 社会の構成単位として、次に威信にもとづく社会階層がある。
- 3) ショバークが主張する比較研究を可能にするため構造分析には、一定の基準が必要であるが、そのためには T. パースンズの型相変数を用いることが出来よう。その基本型は、
 - 1) 情緒性 対 情緒中立性
 - 2) 普遍性 対 特殊性
 - 3) 帰属性 対 達成
 - 4) 限定性 対 非限定性
- 4) 機能的次元としては

1) 適応、2) 目標達成、3) 統合、4) 型相維持の四つがある。ここでは機能分析と同時に四つの下位構造を分析することが出来る。

「適応」機能は、全体社会のレベルでは主に経済活動であるから、ここでは技術の発展が重要な意義をもっている。（経済構造の分析）

「目標達成」は「政治」の機能である、都市の「政治」がどのようなメカニズムで決まって来るかを明らかにする。（権力構造の分析）

「統合」社会の維持される為には「規範」が維持され、行為者間の協力がなければならない。したがって「規範」からの逸脱をおさえ協力をはかる機能が必要である。（統制構造）

「型相維持」機能とは、行為者が役割を遂行するために必要なパターンを学習すること

であるから、家族での学習、学校教育、成人教育などが研究の対象と成る。(教育構造)

〔Ⅲ〕社会変動の分析

一定の構造をもち、一定の機能を営む社会も決して不変のままではない。構造—機能分析の仮定とは別に社会はたえず変化していくものである。したがって構造機能分析を補うものとして「社会変動の分析」を加えることが必要である。

分析の視角として、

- 1) 変化の源泉——内因と外因
 - 2) 変化の及ぼす衝激
 - 3) 構造変化プロセスの一般化
- 等が考えられる。

以上簡単に構造機能分析法を用いた都市社会研究の枠組を示した。それは生態学的研究をふまえた上で社会構造を分析する一つの試みである。

注

1. G. Breese, *Urbanization in Newly Developing Countries*, 1966, pp. 19—22.
U.N., *Report on the World Social Situation 1957*, p.144.
2. ワース, *生活様式としてのアーバニズム*, 鈴木訳編『都市化の社会学』132頁。
3. Park, *Human Community* p.240, 及び *Society*
4. Park and Burgess, *Introduction to the Science of Sociology*, p.163
5. M.M. Gordon, *Social Class in American Sociology*, 1963, p.32
6. *Ibid*, pp.32—43.
7. *Ibid*, pp.43—48.
8. *Ibid*, pp.21—32.
9. ワース, 前掲書, 133頁—146頁。
10. 同上 135頁。
11. 同上 137頁—139頁。
12. 同上 139頁—141頁。
13. 同上 134頁。
14. 近江哲夫, 「都市化理論図式の再検討」, 『社会学評論』51号, 昭和37年, 18頁。
15. 同上17頁。
16. Kolb, "The Social Structure and Function of Cities," *Economic Development and Cultural Change*, Vol.3 (1954—55) pp.30—49.
17. 倉沢進, 「都市化の概念と理論的枠組」, 『社会学評論』51号, 昭和37年, 50頁。
18. ショバークの主な著作は,
①『前産業型都市』(The Preindustrial City)
② "Comparative Urban Sociology," in R. Merton ed., *Sociology Today*, 1959, pp.334—359.
③ "Theory and Research in Urban Sociology," in M. Hauser ed., *The Study of Urbanization*, 1966. pp.157—189.
④ "Cities in Developing and in Industrial Societies : A Cross-Cultural Analysis," in Hauser ed., *The Study of Urbanization*. 1966., p.p. 213—263.
19. Morris Axelrod, "Urban Structure and Social Participation," in *American Sociological Review* 21. 1956.
アクセルロッド, 「都市構造と集団参加」, 鈴木広沢編『都市化の社会学』219頁。
20. William F. Whyte, *Street Corner Society*, University of Chicago Press. 1943.
N. Glazer and D.P. Moynihan, *Beyond the Melting Pot*, The M.I.T. Press, 1968.
Herbert J. Gans, *the Urban Villagers*, Free Press, 1962.
21. William H. Whyte, *The Organization man*.
22. Oscar Louis, "Urbanization without Breakdown : A case study," *Scientific Monthly*, 75 (1952), p.p.31—41.
23. J. Gulik et al., "Newcomer Enculturation in the City: Attitudes and Participation," in *Urban Growth Dynamics in a Regional Cluster of Cities*, ed. by F.S. Chapin and S.F. Weiss, 1962
24. E.Katz and P.F. Lazarsfeld, *Personal Influence*, 1955.
25. E. Mayo, *The Human Problems of an Industrial Civilization*, 1933.
E. Mayo, *The Social Problems of an Industrial Civilization*, 1945.
E. Mayo, *The Political Problems of an Industrial Civilization*, 1947.
26. F. J. Roethlisberger, *Management and the Worker*, 1939.
27. G. Sjoberg, "Comparative Urban Sociology," in K. Merton ed., *Sociology Today*, 1959, p.335.
28. *Ibid*, pp. 335—336.
29. G. Sjoberg, "Theory and Research in Urban Sociology," in M. Hauser ed., *The Study of Urbanization*, 1966. pp. 159—178.
30. F. Hunter, *Community Power Structure* 1953.
J.M. Mckee, "Status and Power in the Industrial Community," *The American Journal of Sociology*, January, 1953,
R.A., Dahl, *Who Governs?*, 1961.
N.W. Polsby, *Community Power and Political Theory*, 1963,
W.H. Form and D.C. Miller, *Industry, Labor, and Community*, 1960.
R.H. Rossi, "Community Decision-making," *Administrative Science Quarterly*, June, 1956
M. Janowitz, ed, *Community Political Systems*, 1961.
31. G. Sjobeig, "Comparative Urban Sociology," in K. Merton ed., *Sociology Today*, 1959. pp. 349—356.
32. T.Parsons の著作は多いが、ここで特に参照したものは, "An outline of Social System," in T. Parsons ed., *Theories of society* Vol. I. pp. 30—79.